

近江地域の開発史

彦戸遺跡群

坂田郡の統一条里^{とういつじょうり}が普及した景観がのこる水田地帯に広がる遺跡群で、彦戸遺跡、高溝遺跡、長門寺遺跡、正光寺遺跡の4つの遺跡を中心とした複合遺跡です。縄文時代から奈良時代にかけて連綿と集落が営まれました。

ここからは、縄文時代の前期から晩期にかけての遺物が多く出土しています。次いで、弥生時代後期から古墳時代中期にかけては大規模な集落が営まれました。高溝遺跡では倉庫跡などの遺構がみつかり、さらに、集落を囲む環濠(堀)と考えられる大規模な溝の遺構が高溝遺跡や彦戸遺跡で検出されています。彦戸遺跡の北側に隣接して法勝寺遺跡群(法勝寺遺跡、狐塚遺跡、奥松戸遺跡、碇遺跡)がありますが、ここでは、弥生時代中期から後期にかけての低墳丘墓群や古墳時代の2つの小規模古墳群がみつかっており、彦戸遺跡群の集落に伴うものかどうかの解明が課題です。

さらに、平安時代(9世紀)には条里が普及することから、水田管理の建物群が随所に認められるほか、先の大溝遺構や小規模な河川がこの時期に埋められています。調査の結果から、9世紀に始まった条里の普及は、11世紀に入り完成したと想定されています。このときに、縄文時代や弥生・古墳時代の遺跡が削平されたり埋められたりしたようです。近江地域の開拓を物語る貴重な遺跡群です。

※条里：現在のほ場整備に似たもので、平野部を統一した方位で区画し、当時つくられた一辺108mの水田区画は、現在の一町区画に継承されています。



大溝の堰跡



手焙り式土器

手焙り式土器（長門寺遺跡）

近江・東海・伊賀地方に共通して分布する「手焙り式土器」が出土。他地域との交流を知るうえで貴重な資料です。



条里遺構（黒田遺跡）



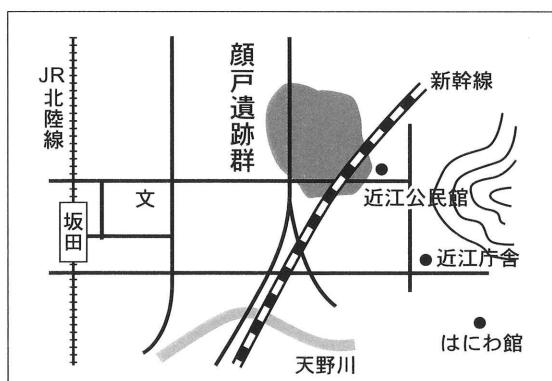
蓋形木製品（傘骨）

黒田遺跡の水辺の祭祀遺構

発掘調査で見つかった大溝跡の一画で、長さ8m。幅1m程度の土坑が確認され、そのなかから、刀形、蓋、三ツ又鍬などの木製品と多数の土器が出土しました。土器のなかには、大和、讃岐、加賀、近江など、各地方から運び込まれたものが含まれており、交通の要衝地における祭祀のようすを知ることができました。



水辺の祭祀遺構出土土器



顔戸遺跡群

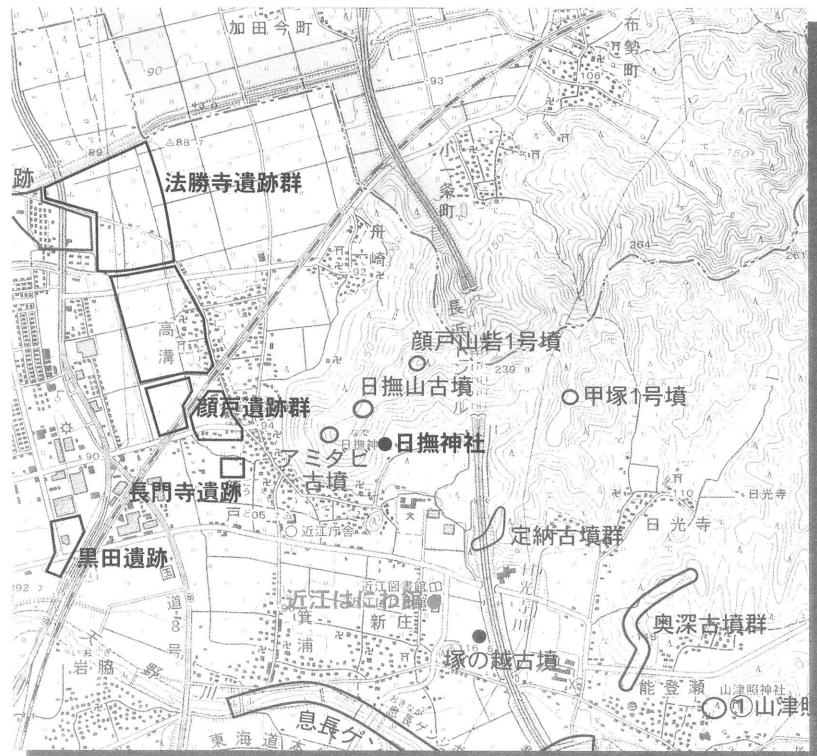
■ 所在地 滋賀県米原市顔戸・高溝

■ アクセス JR東海道線坂田駅下車。徒歩約25分。
※現況は水田です。

米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1050-1 TEL.0749-55-8020

平成24年度 市内遺跡保存活用事業



顔戸遺跡群・法勝寺遺跡群・黒田遺跡位置図